

保健師 最前線

人生の背景に 寄り添いたい

宇治田原町

たにぐち たかよ
谷口 貴世さん



薬を飲んでくれないお年寄りがいたとしよう。「お薬を飲んでくださいと言うだけではなく、お薬を飲みたくない理由とともに、今までどのような環境でどういう風に生きてこられたのか、その方の人生の背景も聞き出すようにしたいんです。そこにこそ本当の理由があるような気がします」

そのためにも、できるだけ足を運んで訪問し、まずはじっくりと話を聞く。時間をかけたからといって信頼関係ができるとは限らない。「でも、いつか心を開いてくれる瞬間があると信じているんです。気持ちが通じると、こちらの思いもきっと伝わると思います。私、まだできてないですけど、そういう心構えでいたいなと思っているんです」。熱い思いが、言葉にこもる。

看護師、他市の保健所の保健師などを経て、町の保健師になって5年目になる。この春、介護医療課に異動となり、町地域包括支援センターで介護予防ケアマネジメントを担当している。要支援1・2と認定された高齢者のケアプラン作りや介護予防教室が主な業務だ。

包括支援センターは介護だけでなく医療や、福祉など高齢者のための「よろず相談所」でもある。「様々な疾患への対応方法や社会福祉制度などいろんな知識が求められ、もう日々勉強です」。介護サービス事業所や医療機関、保健所などとの

ネットワーク作りも大きな仕事だ。「保健師は調整役として、実際にサービスを提供していただく地域の関係機関と顔の見える関係を日ごろからつくっておくことが欠かせないんです」。車で、自転車で、顔つなぎに地域を駆け回っている。

これまでに、母子保健やがん検診に携わってきた。「小さいときからの食生活や大人になってからの生活習慣の結果として高齢者の「いま」があるわけですから、母子→成人→高齢者の三つのステージの視点を持ちながら、地域の健康づくりを担う一員としてお役にたてればと思っています。地域の住民さんとは長いお付き合いになるわけですから」。頼りにしてますよ！

一番の健康法は、職場の仲間とおしゃべりだという。「まだ実行もできていないのに、えらそうなことをしゃべりましたが、これも温かい職場のみなさんに支えられているおかげです」。趣味はなんと、琵琶湖の水面を滑るウェイクボード。「自宅が大津なんです。一枚のボードに乗り、波の上で風を切っていると世界が変わるんです」。底抜けに明るい声ははじけた。

最後に好きな言葉を聞いた。《雨のあとには虹が出る》。「つらいことがあっても一生懸命頑張れば、幸せが待っている。私にとって、住民さんの笑顔と感謝の言葉が虹なんです」